

個の多様性を尊重したニュージーランドの保育・教育

— 短期視察研修からの学び —

Childcare and Education in New Zealand that Respect Individual Diversity:
Learning from a Short-term Study Tour

山口 舞*	大野 康子*	小田 桜乃*
Mai YAMAGUCHI	Yasuko OHNO	Sakurano ODA
齊藤 花奈*	中里 啓子*	請川 滋大**
Kana SAITO	Hiroko NAKAZATO	Shigehiro UKEGAWA

要約 2023年3月11日から17日までの7日間、本学が実施した「ニュージーランド幼児教育視察研修」に参加した。Waikato 大学ではウェンディー・リー先生のお話を伺う機会に恵まれ、その後、主にオークランドとハミルトンの保育園、プレイセンター、小学校、特別学校を見学した。ニュージーランドの教育カリキュラムは、子どもを「有能で自信に満ちた学び手」とするテ・ファリキが用いられている。訪問先の各施設ではテ・ファリキに則った保育・教育が行われていた。本稿では、筆者らが目の当たりにしたそれらの保育・教育を報告するとともに、日本との違いが感じられた点にも触れている。ニュージーランドの個の多様性を尊重する保育・教育内容、親主導型施設、保育者の働き方、幼小接続、特別な支援を必要とする子どもへのサポートなどから、日本に取り入れられることがあるとすれば、それはどのようなことを考え、視察研修にて学んだことをまとめた。

キーワード：テ・ファリキ、ラーニング・ストーリー、ウェルビーイング、プレイセンター、幼小接続

Abstract The “New Zealand Early Childhood Education Study Tour” took place for 7days from March 11 to 17, 2023. At the University of Waikato, we had the opportunity to hear from Wendy Lee, Director of the Educational Leadership Project. We then toured three nursery schools, playcentre, primary school, and special needs school in Auckland and Hamilton. New Zealand’s educational curriculum uses Te Whāriki, which describes children as “competent and confident learners.” At each of the facilities visited, childcare and education were provided in accordance with Te Whāriki. Here, we report on the childcare and education we witnessed at the facilities we visited. We also discuss some of the differences between New Zealand and Japan in terms of childcare and education. We summarize what we learned during our study tour, considering what, if anything, Japan can adopt from New Zealand’s childcare and education, respect for individual diversity, parent-led facilities, working patterns of childcare workers, the connection between preschool and primary school, support for children with special needs, and other aspects.

Key words : Te Whāriki, Learning story, Well-being, Playcentre, Connection between preschool and primary school

1. はじめに

本学では、2023年3月11日から17日までの7日間、学生を対象とした「ニュージーランド（以下、NZ）幼児教育視察研修」が実施され、ハミルトンとオークランドを主に訪問した。本稿では、各施設

* 家政学研究科児童学専攻
Graduate School of Home Economics,
Division of Child Studies

** 家政学部児童学科
Faculty of Home Economics, Department of Child Studies

の見学や現地教員の話などから見えてきた NZ における幼児教育の特色や日本との比較などについて考察を行う。

(1) NZ の概要 (山口)

NZ は、南西太平洋のオセアニアに位置し、首都はウェリントン、最大都市はオークランドである。国土面積は約 27 万 km²、人口は約 520 万人¹⁾。民族比は欧州系 70.2%、マオリ系 16.5%、太平洋島嶼国系 8.1%、アジア系 15.1%、その他 2.7%^{2) 注1)} の多民族国家である。公用語は、英語・マオリ語・NZ 手話である。

先住民族であるマオリ族には、かつて欧州系移民と対立した歴史がある。1980 年代以降はマオリ文化への尊重に対する世論が高まり、就学前から大学に至る高等教育まで積極的にマオリ文化を学ぶ機会が取り入れられていく。

NZ において、日本の保育所保育指針や幼稚園教育要領にあたるものがテ・ファリキ (Te Whāriki) である。内容は、4 つの原理「エンパワメント」「ホリスティックな発達」「家族とコミュニティ」「関係性」と、5 つの要素「ウェルビーイング」「帰属感」「貢献」「コミュニケーション」「探究」から構成されている³⁾。マオリ文化の神話に基づいた精神が取り入れられており、「子どもは宝」として、子ども中心に考えることを第一としている。「子どもたちは、有能で自信に満ちた学び手」として成長することが示され、「何かができる有能な子ども」ではなく「有能だと思える自信」を育てていくことに重きを置いている⁴⁾。

また、テ・ファリキの作成時には、幼児教育の専門家だけでなく親の意見も広く取り入れられたことが特徴の一つである。そのため、1996 年に作成されて以降、親主導型を含む幼児教育 (Early Childhood Education 以下、ECE) 施設や家庭でも取り入れられている。具体的な実践の方法はそれぞれの機関に委ねられているが、2008 年には国内のすべての ECE 施設で、テ・ファリキに沿ったカリキュラムが導入されている。

(2) NZ の教育制度について (大野)

NZ の教育制度は基本的に幼児教育、初等教育 (year0 から year6)、中等教育 (year7 から year13) の後、高等教育 (国立総合大学 8 校、教育大学 4 校、

ポリテクニク専門学校 21 校、マオリ大学 3 校) に進学することが出来る。幼児教育を行う施設としては、保育者主導型の公立、私立の幼稚園や保育園、親主導型のプレイセンター、コハンガレオ他、特別な支援が必要な子どもの教育施設などが存在する⁵⁾。

NZ は 2007 年、教育省によって旧カリキュラムを改定し、ナショナル・カリキュラムであるニュージーランド・カリキュラム (The New Zealand Curriculum 以下、NZC) を教育課程の基準とした。21 世紀に対応した学習観としてのキー・コンピテンシー^{注2)}を中心としたカリキュラムを適応し、目指すべき人間像を「自信を持ち、他者と繋がり、能動的に活躍する生涯にわたる学習者」として掲げた⁶⁾。

NZC のアセスメントにおいて、乳幼児は「何が出来るようになったのか」という従来の目標達成型ではなく「何を学んでいるか」という視点でラーニング・ストーリーを用いて評価している。ラーニング・ストーリーは保育者がテ・ファリキの理念を意識しながら子どもの学びの過程を可視化し、文章だけでなく写真も用いて、エピソードや語りを中心に記録する方法である。それを親と共有し、保育者だけでなく親も子どもの成長を支え、共に評価することを特徴としている。

また、各教育段階間の円滑な接続は、我が国と同様に NZ においても課題となっておりテ・ファリキから NZC への移行に関して、能力観の継続性・一貫性が保たれるよう配慮されている⁷⁾。

2. 遊びを保障し親も共に成長する親主導型 ECE 施設 [Tamahere Playcentre] (齊藤)

プレイセンターは 1941 年、NZ にて「母親の自由な時間と未就学児の社会的発達の機会」を提供することを目的として、親たちが共同で設立したのが始まりとされている⁸⁾。現在は 0~6 歳の子ども連れの家族を対象とし、「親は子どもたちの最初の教育者である」との考えの基⁹⁾、利用する親は必修の学習コース¹⁰⁾があるなど子どもと共に親の成長も促す ECE 施設である。2022 年時点で NZ 内にある認可されたプレイセンターは、ECE 施設の 8.4%である 389 ケ所となっている¹¹⁾。

筆者らはその中の一つ、Tamahere Playcentre を訪れ、有資格者の方のお話を伺った後、施設内を自由に見学した。この施設の利用時間は平日の 9 時~13 時で、料金は利用頻度にかかわらず 1 学期 (10 週)

ごとに \$50 となっている。2歳半以降は子どもを預けて買い物に行くことも可能とのことで、親が子育てから一時離れるという設立当初の目的も引き継がれていた。運営は非営利で行っているため有資格者への給料はなく、ボランティアだという。室内には、粘土や木製のままごと道具、絵本、ビーズが入った筒などの手製の玩具、松ぼっくりや貝、布や造花といったさまざまな製作の材料 (Fig.1) とノコギリのような工具 (Fig.2) などが、コーナーごとに子どもが好きな時に使えるよう置かれており、充実した環境が整えられていた。プレイセンターには他の ECE 施設と同等の、利用する子どもの人数と時間に応じた補助金が政府から出されており、製作の材料などの購入にあてているという。室内からはテラスを通して屋外に出ることができ、下にウッドチップが敷かれた複合遊具や砂場、ブランコなどがあ

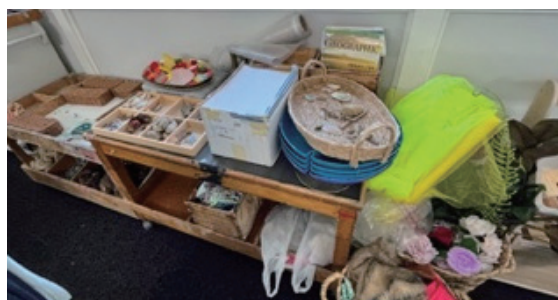


Fig.1 Production materials corner

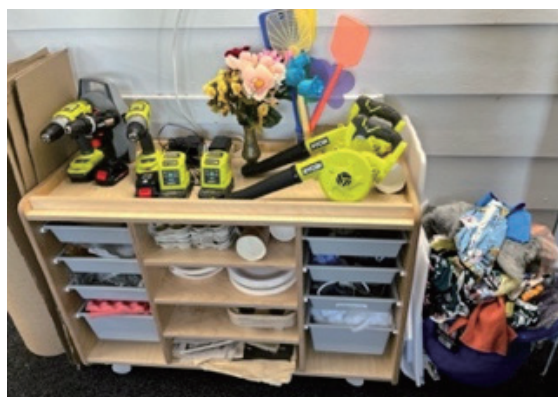


Fig.2 Shelf with tools

今回の訪問を通して得られた、プレイセンターに関する知見として、特に以下の3点を挙げたい。

1 点目は、プレイセンターを制度として整備して

いる点である。認可制度や補助金の導入時は、政府が関与することでプレイセンターの独自性が失われることを懸念する声もあったという¹²⁾。しかし視察において、有資格者対子どもの人数比 (最大 1:5) やテ・ファリキに則った、他の ECE 施設と同等の活動内容の充実が基準として定められ、政府からの補助金で設備を充実させているなど、保育の質が確保されていると感じた。

2 点目は、親の保育への参加だ。プレイセンターを利用することで親が子どもと共に遊び、学習コースもあることから関わり方を学ぶことができ、それを期待してプレイセンターを選ぶ親もいるという。Tamahere Playcentreでは、ラーニング・ストーリーを1学期に2枚程度、各子どもの親が書くことになっている。初めは書き方などに戸惑うが、子どもの様子を写真に撮り、有資格者のサポートを受けたり、他の親のラーニング・ストーリーを参考にしたりしながら書き上げ、振り返ることを繰り返して慣れていくとのことだった。

3 点目は、子どもを尊重する姿勢である。前述したように物的環境が充実しており、子どもの「やりたい」という気持ちが保障されていると感じた。また、遊びの内容に関しては事前の細かなルールはなく、あるとすれば「周りの人や物、場所を大事にする」、「工具は靴を履いて大人と一緒に使う」といった最低限の内容や、「ポジティブに関わる」という価値観に近いものなどであり、火や工具を使った遊びも可能なのだという。これは、テ・ファリキの5つの要素にもなっている「探究」の機会を保障しているといえるだろう。例えば、剣の玩具の扱い方が問題になれば、親全員で集まり話し合って決めていくとのことだった。「小学校では、他の ECE 施設よりプレイセンターの子どもは大人に自分のニーズを伝える力がよく育っていると言われる」との話も聞かれた。親が近くにいる安心感の中、少人数で過ごし、ニーズを伝えやすい環境にいたからこそその評価であろう。また、プレイセンターに入って正面の壁には、利用する子どもたち各々のルーツである国を示した世界地図が掲示されていた。テ・ファリキの5つの要素の一つ「コミュニケーション」の項では、初めに「子どもたち自身の文化およびその他の文化のことはや象徴的表現は推進され、守られる」と明記され、手話、美術、音楽、動作も含む各々の文化の「ことば」に関する能力と理解の発達が必要とさ

れている¹³⁾。また「帰属感」では、「子どもたちは、乳幼児教育の場が、彼らの広い世界の一部であり、保護者やファナウ（子育て応援隊）も含まれることを理解する必要がある。子どもたちは、自分の文化やことば、世界観などが、乳幼児教育の場で大切にされていることを頻繁に感じることができると、環境に馴染みやすい¹⁴⁾とされている。この世界地図は、子どもたちが自分や他の子どものルーツである国を目にすることで、多様な文化の言葉などに興味をもつきっかけとなったり、家族のルーツを含めたありのままの自分が認められている安心感から、このプレイセンターの一人なのだと感じられたりすると考えられ、5つの要素「コミュニケーション」や「帰属感」に繋がるのではないだろうか。

最後に、日本プレイセンター協会加入のプレイセンターを確認すると現在19ヶ所のみであり¹⁵⁾、加入はしていないが似た運営形態の施設があるにしても、未だ普及段階にあるといえるだろう。日本のプレイセンター普及の足枷として、活動場所の確保の難しさや開催日数の少なさ、プレイセンターの理念に対する参加者の無理解などが挙げられている¹⁶⁾。今後、国をあげて経済的な支援と保育の質を確保する基準を設けることは必要なことではないだろうか。またNZのプレイセンターでは、親の成長も目的とされているが、日本においても、親として成長していく過程への支援の必要性が認められている¹⁷⁾。日本に合ったプレイセンターの制度整備や、池本（1999）が述べているように休日や平日の夕方に開設する¹⁸⁾など親の保育への参加方法を今後検討していく必要があるだろう。また、子ども一人ひとりの興味関心やルーツを尊重することは日本でも共通して求められることであり、NZのプレイセンターから学ぶ点は多くあると考える。

3. 保育園（中里・大野）

(1) 一人ひとりの生活リズムが保障されている

【Campus Creche Trust】（中里）

筆者らは、1973年に親協同組合として設立され、自然をベースとして幼児教育が行われている、University of Waikato（以下、Waikato大学）の敷地内にあるCampus Creche Trust（以下、Creche）を訪問した。クラス分けの月齢と保育者と子どもの人数比はTable 1に示す。

Table 1 Adult to child ratio at the Campus Creche Trust¹⁹⁾

クラス	月齢	人数比（人）
WHEIKI	3ヶ月～1歳6ヶ月	1:4
KOWHWI	1歳3ヶ月～2歳6ヶ月	1:5
MAIRE	2歳～3歳9ヶ月	1:8
KAURI	3歳～6歳	1:9

NZの教育省は、ECEサービスにおける出席する子どもの数と大人的人数比を示している。例えば、1日利用のECE施設の場合、2歳未満は子ども1～5人につき1人、2歳以上では、1～6人につき1人である。また、ここでの大人として適用される者とは、「食事の準備と配膳、管理業務、メンテナンス以外の業務に従事する人は17歳以上である」と明記されている²⁰⁾。日本の保育所では以下の表の通り、保育士の配置基準が児童福祉法により規定されている（Table 2）。

Table 2 Staffing standards for Japanese nursery schools²¹⁾

月齢	人数比（人）
乳児	1:3
満1歳以上3歳未満	1:6
満3歳以上4歳未満	1:20
満4歳以上5歳未満	1:30

Crecheのクラスごとの人数比及び、NZの基準は、日本と比べ3歳以降の大人数が手厚いことがわかる。さらに、人手不足となる時間帯について、NZの教育省は、「昼食中、休憩中、またはノンコンタクトタイム中は大人としてカウントされない」と考慮するよう規定している²²⁾。このような基準や規定の違いと、保育の現状や労働環境の違いに関連があるか、今後の検討事項としたい。

Creche園内の環境としては、クラスごとに平家型の園舎に分かれており、それぞれの園庭には裸足で遊ぶことが可能なウッドチップが敷き詰められていた。午後の訪問であったが、午睡中の子ども、室内と園庭で遊ぶ子どもがおり、それぞれのペースで過ごしている様子であった。午睡や食事の時間に関して保育者に尋ねたところ、特に時間は定めておらず、どの年齢でも全員が一斉に午睡する必要はなく、一人ひとりの様子に合わせて食事や睡眠をとっているということであった。NZの基準よりも上回る職員配置をし、午睡の部屋と遊びの場所が分けられていることから、無理のない人的配置と空間的保証が

なされているといえるのではないか。

3歳半以降のクラスにて、保育者に保育をする中で重要なこととは何かと尋ねたところ、「子どものことをよく知り、信頼関係を築くこと」と語っていた。日本の保育においても、保育所保育指針や幼稚園教育要領にて子どもと保育者・教師の信頼関係の重要性について記載されていることから、重視している点は共通しているといえよう。しかし、Crecheでは、信頼関係を個別に築くために、余裕のある人員配置をし、それぞれの子どもの合った生活ができるようにしている点においては、日本の現状とは異なるかと筆者は考える。さらに、毎週の会議では一人ひとりのカリキュラムを話し合うことと、ラーニング・ストーリーを書くことが日々の業務のほとんどであるということからも、個を重視していることが感じられる。

以上より、Crecheでは、日本と異なる配置基準の下、一人ひとりを大切にしたいカリキュラムの話し合いやラーニング・ストーリーの作成による子どもとの信頼関係を重視する保育が行われていた。

(2) 子どものルーツや思いを尊重する

【Campbells Bay Early Learning Centre】(中里)

筆者らは、オークランドからさらに南方のキャンベルズベイにある Campbells Bay Early Learning Centre (以下、Campbells Bay) を訪問し、保育補助として働く日本人の方にお話を伺った。

Campbells Bayでは、保育業務としての、年間カリキュラム、週案・月案ではなく、子どもたちの日々の声を拾い、子どもがどんなことをしているか、どのようなことに興味があるのかをメモし、明日、来週、来月というように興味が続くまで遊びを繋げていく保育を行っている。さらに、その内容をクラスの職員で共有し、正規雇用の保育者がストーリーパークというシステムを用いてドキュメント化・文字化し、個人別やグループ別のラーニング・ストーリーを作成している。

このようなラーニング・ストーリーを書く時間として、ノンコンタクトタイムが1人につき週に2時間は保障されているようだ。他にも、休暇については、1日8時間、週5日、トータル週40時間働く職員は年間での有給が4週間保障されており、休憩についても法律で定められているとのことであった。保育者のウェルビーイングが意識されており、園全

体の雰囲気としても休暇や休憩をとりやすいというお話から、労働環境が整備されていることが窺える。

保育室内の環境では、NZの特徴として、マオリ文化を活かした活動の様子が掲示されていた。また、壁には、ファナウウォールとして、テ・ファリキの5つの要素の一つである「帰属感」を意識できるような、ファーナウ(子育て応援隊)の紹介がマオリ語でされていたことから、多文化を大切にする意識があることは明らかであった。

また、子どもと保育者との関わりの中で、“not”や“don't”を使わないようにし、“Can I~?”と聞き、相手の思いを尊重しているというお話もあった。子ども同士の物のやりとりでは、貸してあげることを促すのではなく、先に使っている子の主張として“My turn. Wait please.”と伝えられるよう促し、それぞれの意見を大切にしながら、時間を区切ることを意識できるような物的環境として砂時計を用意するなどの援助を行うという話があった。

このように、子ども一人ひとりを大切にすることが意識されている中でも、個別にそれぞれの時間を過ごすだけではなく、4・5歳のクラスでは、クラス全体で集まる様子を実際に目の当たりにした。数名の子どもが率先して、Fig.3のようにマットの上にクッションを並べ、保育者がベルを鳴らすと、子どもたちが集まってくる。しかし、全員で集まることを強制するのではなく、参加しなくても良いというお話もあった。この時間では、週末体験したことや、家族についての紹介など、自分の意見を言う場としても活用されているとのことで、テ・ファリキの5つの要素である「帰属感」や「コミュニケーション」が強く関わる場所であると考えられる。一見すると、集団での活動のように捉えることもできるが、これも、一人ひとりが自己発揮できる場となり、個の意見を尊重する機会になるといえよう。



Fig.3 After preparing for mat time

以上のように、Campbells Bay においては、職員同士が日々の子どもの姿を共有し、共通認識をもった上で、一人ひとりのルーツや文化、思いを尊重した保育が行われていることが窺い知れた。保育者の働き方や業務内容についても整備がなされ保育者のウェルビーイングが意識された職場環境であった。

(3) キリスト教信仰を軸にした私立保育園

【Small Fries Christian Childcare Centre】(大野)

オークランド・ノースショアのマイランギ湾に位置した Small Fries を訪問した。Small Fries は 2010 年、地元のマクドナルドがウィンザーパークバプテスト教会に売却され、コミュニティの家族や子どもたちにサービスを提供するチャイルドケアセンターとして運営を始めた。キリスト教の教えとテ・ファリキを融合させたカリキュラムを行う私立保育園であり、0 歳 3 ヶ月から 6 歳が通園している。保育者と子どもの人数比を Table 3 に示す。

Table 3 Teacher to child ratios at Small Fries Christian Childcare Centre²³⁾

クラス	月齢	人数比 (人)
babies	3 ヶ月～12 ヶ月	1:3
toddlers	1 歳～2 歳	1:4
2-3½-year-olds	2 歳～3 歳 6 ヶ月	1:6
pre-schoolers.	3 歳 7 ヶ月～6 歳	1:8

NZ 政府は保育を利用する親に対して週 20 時間は無料になるシステムを導入している。保育利用のパターンや料金について Table 4 に記した。

Table 4 The 20 ECE Hours rate is charged for those hours outside of the 20 hour ECE scheme only²⁴⁾

	Under 3 Years	
	Full Day 7:30am - 5:30pm	Short Day 8:30am - 3:30pm (Minimum 6.5hrs)
5 Days	330.00	300.00
4 Days	295.00	247.00
3 Days	235.00	194.00
	3 Years & Over with 20 ECE Hours	
	Full Day 7:30am - 5:30pm	Short Day 8:30am - 3:30pm (Minimum 6.5hrs)
5 Days	240.00	210.00
4 Days	205.00	157.00
3 Days	154.00	113.00

Small Fries は単なる保育園というだけではなく、地域社会に奉仕するための社会的企業であると園長は述べている。慈善団体として利益をセンターやコミュニティに投資し、雇用機会を創出すること、また、支援の必要な家族にカウンセリングを行ったり、シングルマザーに対してはサポートプログラムやフードボックスなどを提供したりしている。

園の保育者は子どもたち同様にさまざまな国の出身である。子どもに対する視点や対応にばらつきが生じないかを質問したところ、保育の一貫性を保つ為、園ではポジティブガイダンスポリシー²⁵⁾を取り入れているとのことであった。幼児期の子どもたちは自分のニーズや衝動を非言語的な行動で伝えることがあるとし、そのような場面においては個々のニーズを考慮しながらも保育者が介入することが記されていた。具体的には嘔む、打つ、押す、怒鳴る、言葉で他人を傷つける、などが容認できない行動として挙げられ、これらについて行動のフィードバック、子ども自身のネガティブな感情の理解、ポジティブな代替手段の提供など賞賛や励ましを用いてサポート、指導することが保育者の役割なのだと明記されていた。これは「保育者が子どもの行動をコントロールするのではなく、子ども自身が自尊心と尊厳を守りながら感情を理解し、表現するようになる戦略的なサポートである」と語る園長の言葉が印象的であった。

4. 個の発達に応じたなだらかな幼小接続

【Belmont Primary School】(山口)

NZ では、5 歳の誕生日を迎えた子どもから初等教育課程(日本の小学校にあたる)に随時入学していく。初等教育課程は year0 から year6 (5 歳～11 歳)までで、5 歳の誕生日を迎えた子どもは year0 となる。year0 に 5 月 31 日以前に誕生日を迎えた子どもたちが集まり、2 月から year1 の新年度が始まる。

筆者らは、オークランドに位置する Belmont Primary School を訪れた。この学校には、400 名から 430 名程度の児童が在学していて、その国籍は 44 ヶ国にわたり、多国籍の児童が共に学んでいる。

授業の時間割はなく、決められた休み時間もない。担任教員が全科目を担当し、子どもたちの様子を見ながら適宜休み時間を設けている。1 日の授業は、午前が“study”, 午後は“relax”を意識して構成さ

れている。学習はそれぞれのペースに合わせて進めていけるよう教科書はなく、教員がペーパーを用意する。そのため一人ひとりの教員の力量が問われる教育方法であるともいえる。子どもによっては、算数が得意なら算数の時間だけ上の学年の授業を受けることもできる。

(1) 訪問時の授業風景

筆者らの訪問時、1年生は“P”の学習をするにあたり、子どもたちは“P”で始まるもの（princess, pirates など）に変身して登校していた。2年生は“FL”の学習をするにあたり、各自がボートを作ってプールに浮かべる活動“flow”をしていた。そして、友だちが作ったボートを見ながらよかったところを付箋に書いて共有する時間も設けられていた。6年生は、プリントの課題を各々が好きな場所を選んで取り組んでいた。教室中でも校庭でも、自由に場所を選んで取り組んでよいということだった。

(2) 幼小接続

ECE 施設では、4歳から5歳は初等教育課程に入るまでの準備期間として読み書きに親しむ時間が設けられている。そして、5歳の誕生日には、これまでのラーニング・ストーリーを振り返りながら個人にフォーカスし、一人ひとりの卒園児を送り出していく。ECE 施設から初等教育課程には、ラーニング・ストーリーとは別に作成した卒園児に関する文書で申し送りをする。これがいわゆる日本の指導要録にあたる。ラーニング・ストーリーはポジティブな記述のみであるが、申し送りのための文書には、子どもの課題についても記述されており、親と初等教育課程の両方に渡している。

year0 は、幼児教育から初等教育に慣れていくための移行期間である。初等教育課程には必ずしも5歳の誕生日の翌日から行く必要はなく、6歳になるまでに入學すればよい。そのため、親と相談しながら個人の発達に合わせたタイミングで入學することができる。初等教育課程の教室には、6歳頃まで、ままごと、レゴブロック、ぬいぐるみなどが置いてあるプレイコーナーが設置されている。

Belmont Primary School の見学を通して、伸び伸びとした校風、ゆったりとした時間の流れを感じた。次に筆者の思う NZ の幼小教育の特徴を述べる。

まず、幼小の接続に関しては、それぞれの発達に合わせた無理のないなだらかな移行が行われていた。また、初めて ECE 施設に入る子どもたちにも無理のない移行が行われていた。筆者らがお話を伺った ECE 施設の体験保育は、日本のプレ保育のように決められた曜日や時間ではなく、親と一緒にであれば、ECE 施設に好きな時間に来て好きな時間に帰ってよい。年齢や回数の制限もない。そのため、子どもの様子に応じて、安心できたタイミングで入園を決めることができる。未就園児から初等教育課程まで、親子ともに不安感が強くなると思われる各接続期において、親と子どもの気持ちを大いに尊重した仕組みができていていると感じられた。

初等教育課程では、低学年のうちは教科で区切りすぎない幼児教育に近い学習内容が展開されていた。中学年以降も教員によるコントロールを緩めて、子どもの自立を促している。それぞれの発達に合わせた無理のない学習内容となっている。緩やかな学習を行う NZ の子どもと日本の子どもの学習到達度を比較してみる。OECD 加盟国（37ヶ国）による2018年学習到達度調査平均得点の国際比較は以下のようになっている（Table 5）。

Table 5 Programme for International Student Assessment²⁶⁾

順位	読書リテラシー	平均得点
8	ニュージーランド	506
11	日本	504
順位	数学リテラシー	平均得点
1	日本	527
22	ニュージーランド	494
順位	科学リテラシー	平均得点
2	日本	529
7	ニュージーランド	508

学習到達度の国際的な位置づけは、総合的に見て日本の方が高いといえる。このような結果から、NZ 国内ではテ・ファリキの子どもの主体性を重んじる理念と学力低下の間の繋がりを懸念する声も聞こえている。そこで教育省は、これらの声に応える形でテ・ファリキの2017年版を作成した。改訂版は、これまでのカリキュラム・フレームワークは堅持したまま現代的かつ実用的にリフレッシュされ、「就学後カリキュラムと接続の重視」などに関する記述が加えられた²⁷⁾。NZ の教員から聞いた話によると、

「ボトムアップではなく個性を伸ばす教育を行っているため、学習を疎かにする子どもの学習能力は低下傾向があり、伸びる子どもはどんどん伸びる。しかしながら、子どもたちの自己肯定感や自己解決力、回復力は高い」とのことだった。国として子どもたちの全体的な学力の向上を視野に入れながらも、そればかりに捉われることなく、一人ひとりの発達や個性を尊重する教育が行われている。そのような環境の下で育つ NZ の子どもたちからは、これからの社会を生き抜くために必要な非認知能力や心の強さが感じられるといえるだろう。

5. すべての子どもは有能な学び手

【Wairau valley special school】(小田)

筆者らは国立の特別学校へも見学に行った。学校の名前には「水が溢れている場所」という意味があり、かつての生徒が命名したと教えていただいた。一般に「障害」という日本語を英訳すると“disability”となるが、校長が真っ先におっしゃったのは「not disability, 私たちは ability という前向きな言葉を用いる」ということだった。日本においても「障害」の表記についてさまざまな見解が見られるが²⁸⁾、NZ のこの学校において、その呼び方からも「すべての子どもは有能な学び手」と捉えるテ・ファリキからいえるように、前向きで積極的な指導が見てとれる。この学校に在籍する生徒は5歳から21歳までであり、日本と比べて特別なニーズをもつ子どもに対する支援期間が長いことがわかる。21歳以降は社会の一員として過ごす時間となるため、1人での自立した生活を送るための活動(料理やゲームなど)を取り入れたり、最終学年になると地域に関わるプログラムを受けたりする。卒業後は、国や、契約したヘルパーからの援助を受けながら働く。これより、NZ では障害をもつ方に対し、国が労働環境を保障していることがわかる。特別なニーズに対する支援が学校に通っている間だけにとどまらず、継続的に社会と繋がりながら支援を受けられる体制が整っていることは重要である。

筆者らが見学に行った特別学校に就学するまでの過程をお聞きしたところ、まず ECE 施設から評価され、親が申請し、国の審査を経て決定されるという。ここでは、特にニーズが高い生徒が通う学校としてスキルを身につけ、その後は普通学校へ通えるようにしていくようである。池本(2020)によれ

ば、2022年時点のNZにおいて障害のある子どものみを対象とする特別学校に通う割合が0.5%と諸外国の中でも顕著に低く、通常の保育施設や学校で何らかの支援を受けている子どもが10人に1人と高い割合になっている²⁹⁾。これは、障害の有無にかかわらず子どもたちが同じ場で学ぶインクルーシブ教育を推進するNZでは、障害をもつ子どもだけが在籍する学校を減らしているためである。日本の特別支援教育においては、文部科学省を筆頭に、インクルーシブ教育システムの構築が推進されているが、その流れからは逆行するかのようになり、また少子化が進行しているにもかかわらず、特別支援学校・特別支援学級の在籍数や、通級による指導を受ける生徒数は増加している。2022年に行われた国連の審査において、日本がインクルーシブ教育の遅れを厳しく避難された理由の一つでもある。さまざまな背景が推測されるため、一概に比較することは難しいが、日本の特別支援教育とは明らかに方向性の異なるNZの制度から学ぶ点はあるだろう。

さて、この学校では80%が自閉症の生徒ということもあり、視覚的なツールが至る所に見られた。絵のボードや小さなカードでコミュニケーションを取ったり、行動の流れを示したりする。絵の内容は屋外にあるものと室内にあるものでは上段に記載する内容を少しずつ変えるという工夫がされていた(Fig.4, Fig.5)。



Fig.4 Outdoor picture board



Fig.5 Indoor picture card

上記の写真からわかるように、色や絵、言葉などの複合的な視覚的要素を使ってニーズを満たし、コミュニケーションを図ったり生活したりしていた。他には、感情(anger/happyなど)が色によって分けられ、各感情に沿う表情の絵が描かれた表も見ら

れた。これは、まず自分の抱く感情の名前を知り、理解し、“manage”する方法を考えていくために用いられていた。またこの“manage”は“not control”であると校長が強調していた。

ところでNZといえば、2006年に手話を世界で初めて公用語にした国として知られている。この学校でも多くの生徒がビジュアルコミュニケーションとして使っており、室内の壁面にはアルファベットの手話版である指文字の絵が貼られていた。前述したように、絵カードや手話など、自閉症に優位といわれる視覚的なツールを個人のニーズに合わせて用いていることがわかった。また、多動傾向にあり動いた方が集中できる生徒に対して回る椅子を用意したり、刺激を好む生徒に対して凸凹の座席シートを用意したりするなどが見られた。

以上のことから、この学校において、個人それぞれで異なるニーズを満たすための配慮がところどころに見られ、ある程度の枠組みはあるものの、柔軟に対応していることがわかった。一方、「国立ゆえに国からの支援が手厚い」というお話もあったため、NZ国内のすべての特別学校において、この学校と同じように対応できているかどうかは議論の余地があるだろう。とはいえ、インクルーシブ教育への関心が高まり、日本でも喫緊の課題として挙げられる近年、NZの取り組みから学ぶこともあると筆者は考える。

6. おわりに（請川）

日本女子大学の公認でNZ幼児教育研修を行ったのは2018年夏が初回であった。それまで本学では保育・幼児教育を学ぶための海外研修はスウェーデンで行うものしかなく、念願であったNZ研修を公認研修として実施できたのだが、当時の参加者は児童学科の学部生9名のみであった。その後も継続的に行う予定であったもののコロナ禍の影響で海外研修はすべて取りやめとなり、約5年ぶりに実施できたのが今回報告にまとめたこちらの研修である。この度の研修には33名の学生が参加したのだが、文学部英文学科の学生2名と家政学研究科児童学専攻の大学院生5名が参加してくれたことは喜ばしいことであった。今回の報告はその大学院生たちが中心となってまとめたものである。

研修の内容については屋上屋を架すようなことはせず、ここまで触れられていないことをこちらに

書いてまとめの代わりとしたい。NZに到着して2日目から本格的な研修が始まったのだが、午後、Waikato大学にてウェンディー・リー（Wendy Lee）先生のレクチャーを受けられたことが大変良い機会となった。ウェンディー先生から講義を受けられるかもしれないということが分かってからは、院生と共にカー・リー（2020）³⁰を読み直し、事前学習をしてからNZへ行くことにした。



Fig. 6 Professor Lee giving a lecture

ウェンディー先生の講義内では具体的なラーニング・ストーリーが紹介され、学部生にも分かりやすかったのではないかと感じる。特に印象に残っているのが、ある女の子が母親のためにスリッパを作ってあげたという話であった。お母さんがどんなスリッパだったら喜ぶかを考えながら園でスリッパを完成させ、それを母親にプレゼントした。ある日、母親から声をかけられた保育者は、そのまま家に招かれたという。家に行ってみると、プレゼントされたスリッパが大切そうに壁に飾られてあり、「これは私の宝物です」と保育者に伝えてくれたというものであった。ここには母親への「貢献」もあり、また家族の一員であるという「帰属感」という側面もあるだろう。園と家族がスリッパを通して繋がりを持っているところも興味深い。そもそもスリッパを作ったのは保育者が投げかけてなされたことではなく、その女の子が自分の意志で母親にプレゼントしたいという気持ちから起こったものであり、そこには行為主体性（agency）を十分に感じる事ができた。今回の研修を良い刺激として今後も筆者らの学びは続いていくことだろう。

謝辞

本稿執筆にあたりご講義いただいたウェンディー・リー先生をはじめ、見学をさせていただいた各施設の皆様に心より感謝申し上げます。

<注>

- 1 ●複数回答者（混血等により、複数の民族を選択したものと思われる）が存在するため、各民族の合計は100%を超える。
- 2 ●基本的な知識、スキルを基盤として問題解決能力、創造力、コミュニケーション・チームワーク力などを含んだ人間の全体的な資質、能力。

<参考・引用文献>

- 1) Stats NZ (NZ 政府), <http://www.stats.govt.nz> (2023年9月5日閲覧)
- 2) 外務省, ニュージーランド基礎データ, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nz/data.html> (2023年9月5日閲覧)
- 3) 七木田敦, ジュディス・ダンカン: 子育て先進国ニュージーランドの保育-歴史と文化が紡ぐ家族支援と幼児教育, 福村出版 (2015)
- 4) 大橋節子, 中原朋生, 内田伸子, 上田敏文: ニュージーランド乳幼児教育カリキュラムテ・ファーリキ (完全翻訳・解説) —子どもが輝く保育・教育のひみつを探る—, 建帛社 (2021)
- 5) 島津礼子: ニュージーランドの教育課程, 文部科学省国立教育政策研究所・JICA 地球ひろば共同プロジェクト グローバル化時代の国際教育のあり方国際比較調査 (2014)
- 6) 前掲5)
- 7) 前掲5)
- 8) NZ Playcentre Federation (NZ プレイセンター連盟), History, <https://www.playcentre.org.nz> (2023年8月15日閲覧)
- 9) NZ Playcentre Federation (NZ プレイセンター連盟), About Playcentre・Frequently Asked Questions, <https://www.playcentre.org.nz> (2023年8月15日閲覧)
- 10) 佐藤純子: プレイセンターにおける乳幼児期の親子参画の在り方に関する研究 SPACE プログラ
- ラムを実施することの意義と今後の方向性, 淑徳大学短期大学部研究紀要, 55, 65-79 (2016)
- 11) The NZ Ministry of Education (NZ 教育省), Annual ECE Census2022: Facts Sheets, <https://www.educationcounts.govt.nz/publications/ECE/annual-early-childhood-education-census/annual-ec-e-census-2022-fact-sheets> (2023年8月15日閲覧)
- 12) 池本美香: プレイセンター50年の歩みと今後の可能性, 日本ニュージーランド学会誌, 6, 2-15 (1999)
- 13) 前掲4)
- 14) 前掲4)
- 15) 日本プレイセンター協会, 活動中のプレイセンター, <http://www.playcentre.jp/ittemiyo/pcsosai.html> (2023年8月18日閲覧)
- 16) 佐藤純子: 日本型プレイセンターに対するセンター代表者と参加家庭による活動評価, 淑徳短期大学研究紀要, 52, 95-116 (2013)
- 17) 内閣府, 子ども・子育て支援法に基づく基本方針の改正について, https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/meeting/kodomo_kosodate/k_45/pdf/ref3.pdf (2023年8月20日閲覧)
- 18) 前掲12)
- 19) Campus Creche Trust HP より中里が作成, <https://www.campuscreche.co.nz/hillcrest/#anchor1> (2023年10月6日閲覧)
- 20) The NZ Ministry of Education (NZ 教育省), NZ Legislation, Education (Early Childhood Services) Regulations 2008, Schedule 2 Adult-to-child ratios (minimum), <https://www.legislation.govt.nz/regulation/public/2008/0204/latest/DLM1412637.html> (2023年9月10日閲覧)
- 21) 厚生労働省 (1947) 児童福祉法, 第33条より中里が作成
- 22) 前掲20)
- 23) Small Fries HP より大野が作成, <https://www.smallfries.org.nz/mairangi-bay> (2023年8月1日閲覧)
- 24) 前掲23) より転載
- 25) positive guidance policy small fries Mairangi Bay 2023
- 26) OECD: 生徒の学習到達度調査 PISA, 文部科学省国立教育政策所 (2018) より山口が作成

- 27) 前掲4)
- 28) 大矢雅之：「障害者」から「障がい者」へ：「しょうがい」表記から見る，ノーマライゼーション社会へのアプローチ，法政大学公共政策研究科 公共政策志林，8，133-144（2020）
- 29) 池本美香：ニュージーランドのインクルーシブ教育とわが国への示唆，JRI レビュー，6，101, 73-91（2020）
- 30) M.カー，W.リー：学び手はいかにアイデンティティを構築していくか，ひとなる書房（2020）